

〔原著論文〕

マックス・ヴェーバーの哀しみ（その一）

羽入 辰郎¹⁾

The Sorrow of Max Weber (I)

Tatsuro Hanyu¹⁾

Abstract

This paper explains that the reason why Max Weber recklessly tried to prove the connection between protestant ethics and the spirit of capitalism, even by the manipulation of the original materials, was due to his family situation. The key to understanding his motivation is hiding in "The Protestant Ethics and The Spirit of Capitalism", which was written during the time when he was recovering from his mental illness. Most people find his most famous work to be a song in praise of protestant ethics and capitalism, however, what I am going to expose is the sorrow of Max Weber, who loses "the blessing of God".

(J.Aomori Univ.Health Welf.6(3): 289-308, 2005)

キーワード：プロテスタンティズム、母、精神疾患

序

ここに一人の哀しい男がいる。
彼はおのれの職業をまっとうし、多数の著作を残した。それらは百年たった今でも各国語に翻訳されて研究されている。人はその人を「知の巨人」と呼び、尊んだ。彼は「プロテスタンティズムの倫理」と「資本主義の精神」という一見対極にあるこれら二つのものを、原因と結果として見事に結合させたのだ。後に、「職業としての学問」を志望する学生達に対して、学問における知的誠実性の重要性を、脅しを含んだ口調を用いてまでして強く説いたにもかかわらず、自らはこの本を書くために資料の改竄からでっち上げまでして、近代資本主義を生み出した精神はプロテスタンティズムの禁欲的職業倫理の賜物であると主張した。（その手口は拙著『マックス・ヴェーバーの犯罪』（ミネルヴァ書房）で既に述べたので、本稿では扱わない。）「脚注の腫瘍」と言われるまでに膨れ上がったその部分には、彼がいかにこのことが発覚することを怖れていたかが見て取れる。しかも、死の直前まで改訂していたにもかかわらず、その過ちをついぞ直すことなく、嘘を貫き通したまま彼は逝ってしまった。

なぜ彼はそんなにも「資本主義」と「プロテスタンティズム」を結びつけたかったのだろうか。それは彼が

「資本主義」を父とし、「プロテスタント」の母から生まれたことに起源をたどることが出来る。現実には不仲であった両親をまるで親密に融合させようとするかのように、彼は書き綴る。

現実のヴェーバー家で何があったのかを本稿では探っていきたい。知の巨人ヴェーバーではなく、不和の父母の間を揺れ動き、そのあげく見事にまでマインド・コントロールされ、苦悩の末に破綻し、精神疾患をわずらうまでに苦しんだ一人の人間として見ていきたい。本書が『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の“精神”』¹⁾（以下では『倫理』論文とも略す）を取り上げるのは、なぜでっち上げをしてまでも「資本主義」と「プロテスタンティズム」を結びつけなければならなかったのか、その動機がそこには隠されているからである。そして、不仲の両親に育てられ、父と母の間に引き裂かれて心を乱して苦しむヴェーバーの姿は、時代を越えて、普遍的なわれわれの問題でもあるからである。

I. 生育史

1864年、マックス・ヴェーバーは父マックス・ヴェーバーと母ヘレーネとの間に長子として生まれた。一人遊

1) 青森県立保健大学保健科学部人間総合科学科目

Division of Human Sciences, Faculty of Health Sciences, Aomori University of Health and Welfare

びの好きな子であった。やがてこの子は重い病をわずらう。片側の脳膜炎にかかったのである。医者からは白痴になるか死ぬか、と宣告された。病気で寝ている間、体は小さいままであったのに、頭だけが異様に大きくなった。医者はこの子は脳水腫になるか、将来知識を詰め込む頭になるか、そのどちらかだろう、と言った。病が癒えた後も、何年にもわたって痙攣と充血の後遺症が残った。いろいろな神経的不安も現れた。非常に怯えやすい、臆病な子であった。家の中庭をひとりで通ることがなかなか出来なかった。母ヘレーネはこの子を丈夫にさせようと抱きかかえて海水浴をおこなった。この臆病な子は、他の海水浴客が頼むからそういうことはもうやめてくれ、というほど毎日毎日恐怖感から猛烈に泣き喚いた。他の海水浴客からいくらそういわれても、子供を丈夫にさせるため、と信じていた母親はやめようとはしなかった。(この母親の行為は現在のわれわれの眼から見るとは児童虐待に当たる。)この母親は実父から強靱な性格を受け継いでいた。成人した後も、この子はこの海水浴の恐ろしさを忘れていなかった。

学校時代、病気の影響は確かに克服されてはいたが、この子は自分が弱々しく華奢な小僧で、人生のあらゆる事柄について臆病で不器用なのを感じていた。知識欲だけは旺盛であり、学校の宿題などわけもなく片付けてしまっていた。教師に対する尊敬の念は全く欠いており、小馬鹿にしていた。答えられない質問を不意にしてくるこの生徒は、教師にとっては不気味な存在であった。奇妙なのは、この子が書く母親宛の手紙である。そこにはまるでニュースのような事実の描写はあるが、子供らしい感情の表白が全く見られないのである。

「僕は熱中もしないし詩も作らない。それならば読書の他に何をしたらいいでしょうか。そして実際僕は徹底的に読書しています」(『伝記』²⁾: 37頁)。

これが十四歳の時に母に宛てた手紙の一節である。この母親は自分には決して打ち解けてくれないこの長子の内面を知るために、この子の従兄弟に当たる大学生に、息子から来た手紙を全て見せてくれるように頼んでいた。母親の行ったこの行為は、明らかに息子の人権を無視する行為であった。そのことを知ったとしたら、母親になつかないこの子は、激怒したことであろう。

この従兄弟の大学生が実母イダに宛てた手紙には、夕暮れの家族一緒に散歩の際のこの長子の様子が次のように描かれている。

「満月が昇り、星がまたたき、叔父と叔母と甥と息子は森の中を楽しげに歌って行きました。マックスは何としても歌おうとしませんが、アルフレートの方は夢中です。」(『伝記』: 39頁)

母が歌い、父と他の兄弟も歌っているなかで、この長

子は歌おうとしない。音楽性がなかったわけではない。ピアノも習っており、耳は良かった。

母親は年を重ねるとともにますますひどくなるこの子の近づき難さと内閉性にひどく悩んだ。他の弟達も思春期に近づくにつれ母ヘレーネを避ける、という同じ行動を取っていたが、この長男の場合は特にひどかった。堅信礼が近づくにつれ、この長男が母親に対して心を打ち開こうとしないこと、自分の住んでいる宗教的世界への関心を何とかして息子にも抱かせようと努力しても、十五歳のこの長男には宗教的感動が全く欠けており、そして何よりも母の影響を受けるのを避けようとしていることを感じてこの母親は悩んだ。後年、この長男は当時のことを回想して、当時自分は反抗と絶望のかたまりだった、と述べている。当時の母親の手紙の一節に、この長男とのことが書かれているが、「うれしいことにこの頃は、建前として私とはまともな言葉は一言も交わさないというような状態から少々脱したように見えます」(『伝記』: 49頁)とまで書いているのである。

妻マリアンネは『伝記』においてこのことに関して次のように述べている。

「…問題はここなのである。彼女には自分の子供達についてそうであってもらいたくないことがあり過ぎたのだ。無意識のうちに彼女は、謙虚な人間でありながら彼女の父親と全く同じ流儀で、若い者達の魂を自分自身のイメージにしたがって形成しようと苦闘していたのだ。そうする権利を彼女は、絶対者の、自分が実行している神の掟の意識から得ていた」(『伝記』: 50頁)。

激烈なカルヴィニストであった彼女の父親に関しては後に述べる機会があるであろう。何れにせよ母親であった彼女は、この年代の子供たちに要求することが到底まだ無理な道徳的態度を要求していたのである。その上、彼女にはお説教の癖があった。それも人前で小言を言った。母に対して心を閉ざしてはいたものの、本質的には感じやすかった長男はこれを非常に怨んだ。彼女はどんな過失も、ちょっとした都合の悪いことでも、全て極度に重大視した。そして、結局は最後には、彼女の余りにも模範的なことがうるさかったのである。こうして、まだ成人に成りきっていない子供達は、自分達自身の母に対する劣等感から反抗へと逃避するしかなかったのである。こうして息子達の誰も、母親に対しては心を打ち明けないという現象が生じた。母方の祖母は、この頃、ヴェーバーの年上の従兄弟に当たる孫に対して、孫マックスに関して次のように書いていた。

「…私は(これは内緒の話ですが) あの子は自分自身から解放されるためにはもう少し愛情をもって扱われる必要があると思います」(『伝記』: 50頁)。

他方、母親に反して、父親ははるかに楽天的で陽気で

あった。最初からどんなことでもうまく行く、いつ旅をしても自分は晴天に恵まれる、どんなことが起ころうとその良い面を認めることが出来る能力、こうした性格から、息子達は彼をいい仲間のように思うことが出来た。長子マックスは、いずれ自分は母親のようなタイプの人間になるか、父親のようなタイプの人間になるか、その選択を行わねばならない、ということを当時漠然と感じ取っていた。そして彼は、母親よりも父のほうにはるかに自分は近いと感じていたのである。

1882年の春、マックス・ヴェーバーはギムナジウム（古典語必修の、大学に直接つながる9年制の中等教育機関）を卒業し、「ひょろ長く華奢で、手足が小さく撫で肩で『結核候補者』の彼は、燃えるような知識欲と同じ程度にたくましい強健な『頼もしい男』になりたいという願いを抱きながら、ちょうど満十八歳でハイデルベルク大学へ入学した」。

たくましい男になりたい、というこの虚弱児の年来の希望は意外にも早く実現された。酒が強かったのである。当時の学生組合での付き合いにおいて、酒が強いということは決してどうでも良いことではなかった。いかに大量のビールをあおり、それでいて態度を乱さずにいられるか、ということは仲間内で尊敬の念を勝ち取るために重要なことであった。虚弱児マックスは「見事な酒豪ぶりで頭角をあらわした」のである。やがて体型も変化してきた。ひょろ長かった彼は肩幅も増し、ビール腹で肥満すらしてきた。運動も苦手だったこの子が、朝にはフェンシングの稽古も続けていた。当時の学生組合には必須だった決闘のためである。一年の第三学期には念願の決闘も行い、頬に斜めに大きな刀傷をこしらえることも出来た。

この時代のことを回想して、後年ヴェーバーは次のように述べた。

「学生組合と下士官時代に平素『果敢たれ』と仕込まれたことは、疑いもなく当時強く私に影響し、少年時代に著しかった内的な臆病さや自信のなさを取り除いてくれた」（『伝記』：57頁）。

学生組合というこの共同体の中で自己主張することの出来た者は、社会に出てからも非常な自信を持ち、自分の優越を感じて終始冷然としていることが出来た。この共同体内部において、温かな友情などというものは存在しなかった。互いに距離を置き、厳しく監視し合い、批判し合い、切磋琢磨する。友情などというものは男性的なものではないとされたのである。外に現れた態度のみが重視され、男性の理想はそれを要求した。学生組合の内部において問題などというものは存在しなかった。どんなことが起ころうとも、全ては決闘で解決出来る、と信じられていた。

他方、この長男の変化は両親にとっては単純に喜べることではなかった。この長男は儉約の精神など全然持ち合わせていなかった。組合の「義務」、赤い学生帽、学生組合員の礼装、酒場、宴会、決闘のための遠征、それに旺盛な食欲。これらは毎月の仕送りなどよりはるかに大きな出費を要求した。この長子はそのたびに臨時の追加を請わねばならなかったが、これは父を立腹させた。さらに、母ヘレーネは頬に大きな刀傷を走らせているこの長男に始めて出会った時、驚きと不安のあまり、猛烈な平手打ちを食わせる以外のすべを知らなかった。

ヴェーバーの伝記を読むと、ひとつ奇妙なことに気づかされる。このヴェーバーという男は、粗暴で享乐的な父親の価値観の中で生活している時、奇妙なまでに生き生きとしているのである。学生組合に入り、手足だけがひょろ長い虚弱体質だったこの男が、ビール腹となり、学生組合の中でも一目置かれ、決闘で頬に刀傷までこしらえていた頃、彼は確かに明るいのである。それが母ヘレーネの価値観とは全く相容れない生き方であったことは、頬に刀傷をこしらえて帰ってきた息子を見た時、平手打ちにする、という反応しか出来なかったこの母の狼狽振りに見て取れる。

ところが、この三学期間の素晴らしい学生生活の自由のあと、彼を待ち受けていたのは兵役であった。ビール腹で太ったものの、手足は相変わらずひょろ長く、太った体を支えるのがやっと、という状態であった。この子自身は気付いていなかったが、次の課題はこの体に筋力と持久力を付けることであった。1883年、十九歳の秋、彼は兵役を済ますためにシュトラースブルクへ行った。当初、慣れない環境に、彼はひどく緊張した。案の定、教練は彼の体に悲鳴を上げさせた。細い足と足の関節は何時間にもわたる教練に耐えられなかった。なすべきことなのであるから、そこから良い面も取り出すことが出来るはずであると主張し、不愉快であることを断じて認めようとしぬ母の手紙に対して、当時ヴェーバーは不機嫌に次のように返信している。

「僕が僕の生き方が何らかの点で有益だということをもう今ではある程度感じているだろうというあなたの確信は、最初から僕の根強い不信にぶつかってしまいます。いずれにしても、たといそのような感じがあったにせよ、腫れて痛む足の関節で毎日七時間も駆け回ることからくる別の感じでそんなものは消されてしまうのです」（『伝記』：58頁）。

ところが、しばらくたつと体の方が慣れてきた。体操は全然不向きだったが——「おいこら、まるで百ヘクリットルのビヤ樽が鉄棒にぶら下がってるみたいじゃねえか！」と下士官から怒鳴られたが——持久力は他の一年志願兵よりもあることが分かってきた。

いくら行軍してもへたばらぬ点で他を引き離していた。さらに別の面でも、兵役は彼の隠れた才能をあらわにしてくれた。その二年後（1885年春）の第一回将校訓練で再び二ヶ月間召集された時には、人の上に立って命令し教育する能力が生まれつき備わっていたことが明らかになった。もはや家の中庭も怖くて通れない虚弱児マックスではなかった。彼はたくましく、実務能力も兼ね備えた男性になれたのである。

II. 父母の価値観

兵役時代、マックス・ヴェーバーはシュトラースブルクにある母の姉イダのバウムガルテン家に入出入りしていた。そこで彼は、自分の家での父と母との価値観の対立がもっと激しく苛烈な形で現れているのを見た。伯母イダは、ヴェーバーの母ヘレーネのように夫に対して臆病では全くなかった。彼女は自分のキリスト教的価値観を全面的に打ち出し、そのためか自分の息子達との精神的交流も却って出来ていた。ただし、ヴェーバーはバウムガルテン家を訪ねるたびに、自分がバウムガルテン家の基調となっている人生観、つまりイダの価値観と対立を迫られているように感じた。そのことを兵役の終わった一年後、ヴェーバーは手紙で書いている。

「…僕はこの家を支配しているある種の根本的な物の見方に、意識的に、非常に決定的に対立しています。自分を完全に変えてしまわずには僕はこの対立を放棄することは出来ませんし、また放棄する理由もありません」（『伝記』：69頁）。

あらゆる行動を倫理的観点から見、絶対者によって測ろうとするのは「エキセントリック」であるという自分の父親の考えに、当時ヴェーバーは完全に同意していた。自分の弱点を笑って受け入れるゆとりを持たず、「一切が無か」という判断によって人間の本性に強制を加えようとする圧力に、この青年は反発せずにはいられなかった。こうした「過度の緊張」は、この青年が当時人生に求めている「天真爛漫な幸福」というものへの敵であると思わざる得なかった。当時ヴェーバーは書いている。

「バウムガルテン家の人生観に対して何を非難することが僕にあるのか？ 非難することは恐らく何もありません。…僕としてはただ、この人生観が当事者の人生の幸福をえてしてそこないかねない——そこなうに決まっているというのではなく——ような或る種の偏屈さに導くという危険があるように見えると言っただけです…」（『伝記』：68頁）。

ここで確認しておくべきことは、当時のヴェーバーが、伯母イダに代表されるようなカルヴィニズム的価値観に自分は敵対しており、むしろ人生での「天真爛漫な幸福」

を満喫することを良しとするような父親側の価値観に完全に立っている、と自覚していたということである。カルヴィニズムは彼の楽しき人生観の敵だったのである。勿論、彼は、自分が母のことを理解出来るようになったのは、イダのおかげだ、ということも同時に認め、感謝していた。但し、それはこの時は母から離れており、自分の母の道徳的存在と要求の圧力に直接さらされずに済んでいた時期だからこそだったのでは、ということもマリアンネは『伝記』で忘れずに付け加えている。

ではイダとヘレーネというこの二人の姉妹が育ったカルヴィニズム的宗教性というのは、一体どのようなものであったのであろうか？ そのことを知るためには、彼女等の父親の世代にまで遡らねばならない。

カルヴィニズムという、ジュネーブにいたカルヴァンという宗教思想家から宗教改革期に生じたこのプロテスタントの一派に対して、一番特徴的なことを述べよと言われるならば、予定説であろう。神は永遠の昔から人類を二種類に分けられた。片方は救われる者であり、片方は神の永遠の呪いによって地獄に落ちる者である。神はただ自分の栄光を顕さんとして全く恣意的にこの両者を決めたのである。重要なことは、カルヴィニズムにとって神とその被造物に過ぎない人間との間には絶対的な距離があり、何らかの人間的努力がそこに介入する余地は全くない、ということである。例えば、永遠の滅びへと神から運命づけられた個人が、何か善行を積むことによって、そのことによって神の意志を変更してもらって救われる者へと変わり得るなどという可能性は一切ない、ということである。誰が救われ、誰が救われないかは、永遠の昔から既に決定されているのである。この場合、信徒にとって最も重要なこととなってくるのは、一体自分はどちらの側に属しているものであろうか？ という疑問である。分かりやすい例え話で説明しよう。従来のカトリックの信者にとっては、昨日泥酔するまで飲んでしまい、今日は頭ががんがんして仕事にならなかったとしても、明日から一生懸命働けばよいのである。カルヴィニストにとってはそうはいかない。昨日泥酔するまで飲んだ、ということそのことが、既に自分は選ばれていない人間に属していることの証拠となってしまっているのである。またもっと悪いことをしたとしてもカトリックには懺悔の秘蹟という心理的安全弁があるが、カルヴィニストにはない。聴聞する司祭が救われる側の人間に属しているとは限らぬからである。結局カルヴィニストに残されている道は、自己を救われる側の人間であると確信し、その確信に基づいて注意深く毎日の自分の行動が救われる者に値するものであったか否かを自己審査し、飽くまでも救われる人間に属している人間として絶えず自分の行動に厳格に注意を払いながら生きてゆく、ということ

の他はなくなる。(これは殆んど強迫神経症の世界である。) またここから、「隣人の罪惡に対する場合…自分の弱さを意識して寛大に救助の手を差し伸べるのではなく、永遠の滅亡への刻印を身に帯びた神の敵への憎惡と蔑視」(AfSSp, Bd. 21: 32, 大塚訳: 208, 梶山訳・安藤編: 225) というカルヴィニズム特有の現象が生ずる。

母ヘレーネの父親は激烈なカルヴィニストであったが、この父が一人の息子に堅信礼に際して与えた手紙が、このカルヴィニズム特有の「永遠の滅亡への刻印を身に帯びた神の敵への憎惡と蔑視」をよく現してくれている。

「…神を愛し、婦人を敬い、隣人を愛するというこの三つのことをいつも念頭に置き、さらに第四には、おまえが悪人として卑怯者として非難されるのを聞くよりも私としてはおまえが死んだと聞くほうがいいと思っていることを忘れるな。…おまえもファレンシュタインと名乗る以上、私はおまえに立派な名を伝えたのだ。その名に決して泥を塗らないでくれ。おまえのためにこの名が尊敬されねばならず、——そして私は心から祈るが、決して罵られ、非難されてはならない。そのように心がけて生きてくれ。——そうでなければ死ぬがいい!…」(『伝記』: 5頁。強調は引用者)。

四人の息子達のうち、三人はそれが可能になるや海外に走り、一人はこっそりと逃げ出した。ヴェーバーの母ヘレーネはこの祖父との後妻の間に生まれた娘であった。ヘレーネの父ゲオルク・フリードリッヒ・ファレンシュタインは彼女が九歳の時亡くなっているが、彼女は父親から「鉄のような意志力、活動性、毅然たる道徳的態度、癪の強さ、熱烈な感動性」(『伝記』: 15頁) を受け継いだ、と『伝記』は伝えている。

そして息子は『倫理』論文において次のように書く。

「自分が救われているか否かという問いが前面に現れてきた限り…少なくとも、カルヴァン自身のように、恩恵が人間の内に生み出す堅忍な信仰がみずからそれを確認するということを指示するだけですますことは、もはや不可能となってきた。とりわけ牧会の実践が予定説から生じてくる内心の苦悶を絶えず問題にしなければならなくなったために、カルヴァンそのまの立場を固守することなどでできなくなったのだ。こうした困難に対処するために様々な方法が取られた。…特に牧会上の、相互に関連しあう二つの種類の勧告が特徴的なものとして現れてきた。その一つは、誰もが自分は選ばれているのだと飽くまでも考えて、全ての疑惑を悪魔の誘惑として斥ける、そうしたことを無条件に義務づけることだった。自己確信のないことは信仰の不足の結果であり、したがって恩恵の働きの不足に由来すると見られるからだ。このように、己の召命に『堅く立て』との使徒の勧めが、ここでは、日ごとの闘いによって自己の選びと義認の主

観的確信を獲得する義務の意味に解されている。こうして、ルターが説いたような、悔い改めて信仰により神に依り頼む時必ず恩恵が与えられる謙虚な罪人の代わりに、あの資本主義の英雄時代の鋼鉄のようなピュウリタン商人の内に見られる、また個々の事例ならば今日でもなお見られるような、あの自己確信に満ちた『聖徒』が練成されてくることになる。今一つは、そうした自己確信を獲得するための最もすぐれた方法として、絶え間ない職業労働を厳しく教え込むということだった。つまり、職業労働によって、むしろ職業労働によってのみ宗教上の疑惑は追放され、救われているとの確信が与えられる、というのだ」(AfSSp, Bd. 21: 19-20, 大塚訳: 178-179, 梶山訳・安藤編: 201-202。強調は引用者)。

「個々の事例ならば今日でもなお見られるような、あの自己確信に満ちた『聖徒』とは、一体誰のことを指してこの息子は言っているのであろうか?

但し、妹ヘレーネと姉イダとの間には決定的な違いがあった。イダは自身の宗教観のために夫と対立したが、ヘレーネには夫と対立するだけの勇気がなかった。嫁マリアンネは次のように書く。

「ヘレーネが敢えて一戦に及んでもとにかくこのやり方を変えさせようとの断固たる決意を早くから抱いたとすれば、恐らくまだ事態は好転していたろう。しかしその点では、他のことではあれほど毅然としていた彼女も軟弱過ぎた——後日彼女はそれを後悔しているが、けれどもこれは彼女自身の利害に関する問題だったのに——」(『伝記』: 112頁)。

ヘレーネの母の死によって相当の額の遺産がヴェーバー家に転がり込んできた。いまや家の所得の半分以上がヘレーネの財産から入ってくるようになった。家は増築され、社交の範囲も広がった。それだけ豪華な料理や上等な葡萄酒が用意されるようになった。ところがヘレーネは五十代になっても一定の家計費も自分の小遣いも持たされていなかった。彼女は相変わらずいつも帳尻の合わない家計簿を持って、夫マックスのところへ行き、出費についてお願いし、その都度夫の許可を得なければならなかった。夫は金銭面に関しては全て監督していた。とはいえ、これは当時のブルジョア階級の夫にあっては当然のことであった。家の所得は一人で管理し、それがどれほどの額になっているかなどということは妻子には知らせないというのは、当たり前なことなのであった。婦女子には金銭問題など全然分からないし、金銭問題にかかずらうことなど女性としての「本性」に合わない、というのが当時の家父長的ブルジョア男性の常識であったのである。ところが、家の所得の半分以上がヘレーネの遺産から入ってくるようになると、これは妙なことになってきた。これだけの贅沢とせめて同額の金を困窮者

のために用意することは出来ないのでしょうか？しかし、そのようなことを夫に話す勇氣はヘレーネにはなかった。他方、夫マックスの方は、困っている人に自分達の贅沢から少しでも分け与えたいというますますつのってくる妻の願望を思い上がりで見なし始め、この思い上がりは妻の姉イダの悪しき感化のせいだと思っていた。彼にとっては妻が自分の財産に口出しするなどということは、考えられないことであった。

ヘレーネは夫の死後、かなり後になってから、成人した息子達に宛てて次のように書いた。

「子供に死なれるという目に合いました。いろいろな事情から、また一部には健康と人生の喜びとに満ちた夫の性格には、私と一緒に死のもたらす苦悩を最後まで味わい尽くすことが堪えられなかったのです、私は全く一人でこの苦境に堪え通さねばならず、しかもそれと同時に、神への信仰と、あらゆる宗教的發展に対する関心——彼にはそういう関心はありませんでした——を固めねばならなかったのです。私は当時、自分が一人で悲しみに堪え、あの人の性格に逆らってあの人を無理に私と共に歩ませようとしないうことを、思いやりであり、神の欲せられる諦念であると思っていました——が、それは怯懦だったのです。この最も重大な、最も内面的な事柄において誤解されはしないかという不安だったのです。そして私は、どのようにそこから疎隔が広がっていくのかということを感じもしなかったのです…」(『伝記』:32-33頁)。

四歳になる娘が病気で死んだ。その前日のクリスマス・イブには声がかれているだけで元気であったのに、翌日にはすでにもう悪性のジフテリアの症状が現れていた。結婚の最初の年に一人の赤ん坊をヘレーネはすでに亡くしていたが、その時と今回とは違った。四歳になる娘はもう人を魅惑する存在になっていた。抵抗も出来ずに死んでゆく子供の枕元で過ごした時間はヘレーネの心に刻みつけられた。夫も最初は妻と共に深い悲しみに打たれていた。が、そのうちまだ悲しみに打ちのめされている妻を放ったらかしてしまっただけで、いつまでも続く個人的苦しみから目を背け、人生の喜びを味わうことから妨げられまいとする他の多くの男達と共通する性格を彼もまた持っていた。「彼は歩みを共にしませんでした。」それと共にヘレーネの意識の表面に、夫との内面的交わりでの一つのはっきりとした裂け目が、そして二度と閉じられることのない裂け目が初めて浮かび上がってきた。すでにずっと以前から彼女の内面の深部で醸造されていたものが、いまや意識の表面に浮かび上がってきたのである。それは自分が若い頃愛した男が、自分とは全然別種の人間であるということだった。普通ならいつも自己卑下に傾きがちであったはずの彼女が、自分の夫を彼女自身の

揺るぎない尺度に当てはめてみる、ということをやった。当然彼女の夫は、この尺度を満足させることが出来なかった。夫に対する不可避的な疎隔が始まった。夫は、自分の妻が自分とは全く別の世界に生きていることを気づけなかった。彼女は相変わらず進んで彼に服従して仕えていたからである。

Ⅲ. 母による息子の取込み

少年時代を通じて、マックス・ヴェーバーは母ヘレーネに対して心を閉ざしていた。細かいことにまで口うるさく干渉し、しかも余りにも模範的な生き方をしている母に対して反抗し敬遠するというこの傾向は、他の息子達にも見られた。しかし、何といても一番激しく徹底的に母を拒絶していたのが長子マックスであった。この場合、注意すべきことが一つある。子供はどんなに激しく親を拒絶していても、否、むしろ意識レベルで激しく拒絶していればしているほど、心の奥底では両親に愛されたいという気持ちを秘めている、ということである。これが子供の哀しい性である。そして、自分でも気づかぬほどの心の奥底に、固く秘められたこの親への思慕の激情は、取扱いを間違えると非常に危険なものとなる。拒絶するに値する理由があったからこそ相手を拒絶していたのである。拒絶するに値する親だったからこそ、反抗し心を閉ざしていたのである。それを一切忘れてしまい、お母さんと理解し合えるという喜びに突っ走ってしまう時、その子は非常に危険な状態となる。「お母さん、お母さん、お母さん…」その子はその喜びだけで一杯となる。それを口に出して言えなかった時期が長ければ長かったほど、愛情を求めることを自分に禁じていた時期が長ければ長かったほど、その子は母の呪縛に簡単に捕らえられてしまうことになる。

確かに兵役時代、バウムガルテン家に入入りし、母の姉イダの生き方を見たヴェーバーには、それまで全く理解出来なかった自分の母のことが少しは理解出来るようにはなっていた。母に打ち解けるようになったのは、それが原因の一つであったであろうことは確かに言えよう。但し、それだけではない可能性があるのである。

兵役が終わるとヴェーバーはベルリンの両親の家に戻った。二十歳だった。兵役の二年間で彼の母に対する態度は変わっていた。『伝記』は次のように述べる。

「母親の心は何よりも、息子が今は実際に彼女の方へ向いて来、彼女の内面の世界に共感すると同時に自分の内面をも彼女にのぞかせようと努力することがうれしかった。

『マックスはまたすっかり腰を落ち着けてくれました。そして私はこの年のマックスの内的發展に非常な喜びを

感じています。彼は見違えるほど思いやりが深く打ち解けて来ました、しかもそうしてやれば私が喜ぶとはっきり意識して。講義が始まる前、私が何とか仕事を片付けると、私達は午前中二人で一時間ほどチャニング〔教義にとらわれない当時の自由主義的なピューリタニズムの思想家〕を読みました…』（『伝記』：77頁）。

この『伝記』の記載は奇妙である。二十歳にもなった男が母親に対して自分の内面を覗かせようと努力し、しかもそういうことをすれば母親が喜ぶということをはっきりと意識しておこなっている、というのであるから。しかも子供時代はあれだけ母親に対して反抗的で内面を決して見せまい、としてきた男が、二十歳になってからわざわざ時間を作って母親と一緒に読書会をやるというのであるから。『伝記』を書いているマリアンネ自身は気がついていぬようであるが、マックス・ヴェーバーの異常さは実はここから始まっている。

正常に発達してきた男性であれば、二十歳という年頃は、両親相互との正常な距離を作り出すことに成功する年代である。ところがマックス・ヴェーバーはその逆をいっているのである。あれだけ疎隔していた母親への接近を、この時期からおこない出しているのである。思春期以降の男性の子供の、母親への接近が一体何を意味するものなのか、ここで少し考えてみる必要がある。

母方の祖母は、ヴェーバーの年上の従兄弟に当たる孫に対して、孫マックスに関して、すでに見たように、昔、次のように書いていた。

「…私は（これは内緒の話ですが）あの子は自分自身から解放されるためにはもう少し愛情をもって扱われる必要があると思います」（『伝記』：50頁）。

マックス・ヴェーバーは母親に愛された子供とはいえない。この母親ヘレーネという人物は、子供を愛する能力をそもそも欠いた人物であったように思われる。どの男の子も彼女に対しては疎隔し、遠ざかろうとした。これは彼女が支配的なパーソナリティーの持ち主であったことを裏書する。そして幼少期、愛されなかった子供が、二十歳を過ぎてから母親に接近し始める、ということは何を意味するのか？

愛されなかった子供は、母親に愛されたいという自分の思いを凍結させ、自分の内心深くに潜める。今や表面に出ているのは絶望的な反抗心だけである。愛して欲しいなどという気持ちはおくびにも出さない。なぜなら、そのような母親に対する正直な気持ちを出して万一傷つけられれば、致命傷となりかねないからである。ただ、このような子でも母親への貢物はする。それは哀しい貢物である。ヴェーバーの場合は、それは年不相応なまでに背伸びをした歴史論文であった。まだ十四歳にもなっていない頃、クリスマスの贈り物として、二篇の歴史論

文をこの子を書いた。『皇帝と法王の立場を主眼とするドイツ史の展開』と『コンスタンティヌスから民族移動までのローマ帝政時代に関する多くの史料による論文』であった。そこには「不つつかなる筆者自身、その両親、およびその兄弟その他に捧ぐ」という献辞が書かれてあった。〔注意せよ！発病後も、結局この愛されなかった子がしていたのは『宗教社会学論集』という、同じような、そして同じように背伸びをした歴史論文の執筆であった。"同じように背伸びをした"というのは、次のような意味においてである。ヴェーバー自身も述べていることであるが、こうした広大な領域の研究を行うためには、どうしても自分自身で一次文献を検索することは出来ず、二次文献に頼らざるを得ない。それは純粹に学問的に見た場合、独創性を主張することは出来ない業績にか過ぎないのである。"同じように背伸びをした"というのはそういう意味においてである。〕

母親への愛に絶望していたはずのこの子が、二十歳過ぎてから母親へ近づき始める、ということはどういうことなのであろうか？絶望の裏側に隠れているのは希望である。こういう子供の場合気をつけなければならぬことは、母親にいつか愛されたいという気持ちが幼少期のそのままの形で隠れている、ということである。いつかあのお母さんに愛されたい、愛されるかもしれない、という希望が隠されているのである。危険なのは絶望ではなく希望なのである。どうせ愛してなどくれぬ親だと、絶望して母親から離れてゆくなまだよいのである。危ないのは、お母さんが愛してくれる、あのお母さんが今現に自分の目の前で自分に向かって微笑んでくれている、という希望に捕らえこまれることである。なぜならこの母親は絶対にあなたを愛さぬ母親だから。今は大人になったあなたが、利用価値のある大人になってくれたから、つかの間の今の自分の利害のために利用しているに過ぎぬから。

こういう親の場合、夫婦関係は決まって陰険である。世間体としては取り繕ってはいたとしても、実際の夫婦関係は破綻を帰している。理由は簡単である。子供すら愛せなかった人間に、配偶者を愛することなど出来ぬからである。

さて、今やこの母親には立派な男性となった子供が出来上がったのである。彼女はどうか。立派な一人前の男性となったあなたを、今やあなたの母親は自分の配偶者であるかのようにあなたを引きずり込み、あなたに対して夫の愚痴を言い、あなたに細々したことまで相談し、夫の目の前であなたを若いツバメのように馴れ馴れしく扱い、本当の配偶者であるあなたの父親に対してあなたを敵対させるのである。立派な一人前の男性となったのは、あなた自身の血のにじむような努力のお陰で

あって、この母親は何一つあなたを助けてくれたことはない。幼少期のあなたが一番母親の愛を必要としていた時、そして思春期の一番あなたが苦しんでいた時、この母親はあなたのことを何一つ助けてはくれなかった。ところがこの女は図々しい。今や利用価値の出来たあなたを平然と捕らえこみ、利用するのである。

母に心を開き、一緒に宗教書を読む時、ヴェーバーがどれだけ幸せであったかを想像することは出来る。ただそれをしてはならないことなのである。なぜなら、それは決して愛してくれない母への奉仕であるから。そして、そこで待ち受けているのは、この忘恩の女のための父親との——本来は価値観が一致していたはずの、対立する必要などなかったはずの父親との——敵対であるから。

もう一度繰り返そう。今やこの長男は母親にとって必要な人間となったのである。夫婦間の関係が険悪となる時、えてして母親側は、今では夫婦間の問題に関しても相談出来るまでに成長した長子を自分の側に取り込み、まるであたかも自分の配偶者であるかのように自分の相談相手とするようになる。しかしながら、それは本来は子供たちの親である両親夫婦内で解決すべき問題なのであり、多少のいざごは生ずるとしても、それを覚悟で夫婦で話し合うべき事柄なのである。これを統合失調症（旧名精神分裂病）の研究領域においては「世代間の境界の曖昧化」としてとらえる。要するに、配偶者間で解決すべき問題に、次世代の子供を引きずり込む現象である。「マックスは愛すべき『長女』です」（『伝記』：118頁）という従姉妹の女性の手紙での発言は、それを裏書きしている。そして、その長子が男子である場合、ただでさえ微妙な思春期の父親との関係に加え、母親側に加担した人間として父親に対して敵対する長男、という役割をも負わされてしまうのである。この間の事情を、こうした心理的機微には疎いマリアンネの『伝記』すら、次のように伝える。

「彼女自身も黙従しないで彼〔夫マックスのこと〕と戦った方があらゆる点で良かったのだということは手遅れになってから気がついたのだ。というのは、彼女を苦しめる重荷は今や時として堪え難いまでになり、年上の息子に肩代わりさせずにはいられないほどだったからである。そのために彼女は——そうしようとは思わずに——息子を父に敵対させることになった」（『伝記』：113頁）。

この長子はどちらかといえば父親の価値観に自分は近いと感じ、父親的な享樂的學生時代を楽しんでいた男だったはずなのである。父親の価値観に従っている時、彼は幸せであった。ところが、それが今では母親の側に回り、父親と敵対せざる得ない状況に徐々に徐々に引きずり込まれていくのである。勿論、この時点ではまだヴェーバーは、母親が悩んでいるからといって、いつも

父親だけが悪いというわけではないということをも理解していた。しかしながら、これ以降、ヴェーバーは母親の側へ引きずり込まれてゆく。

ここで一点言っておかねばならぬことがある。これもよくあることであるが、実はこの母親は、度し難い押しの強さを持った人間であり、誰かが押さえつけておかねばならぬ人間であることが往々にしてあるのである。それを夫の側は本能的に感じ取っており、だから権威で押さえつけるのである。しかしながら、これは夫にとって不利な戦いとなる。なぜなら、形の上では、したがって子供達の立場からは、一見夫である父親の側が一方的に不当にお母さんを押さえつけているとしか映らないからである。他方、彼女の側は、“弱々しい抑圧されたお母さん”という姿を意図的に子供達に見せる。それを信じて、お母さんを助けてあげたい、という心情を子供達が持ち始めると、子供達を用いた代理戦争を始めるのである。今や、夫は家庭内で孤立させられる。彼女の方が一枚上手だったのである。但し、彼女が絶対にしないことは、決して自力で夫の暴政に立ち向かおうとはしないということである。ここに彼女の汚さがある。イダとヘレーネの違いがここにある。姉イダは自分の力で夫と戦った。敢えて自分の主張を夫に伝える勇気を——そして、それは夫への愛情の証でもある——持っていた。しかしヴェーバーの母ヘレーネは違った。自分では一切戦おうとせず、全てを子供達にさせたのである。そしてこの代理戦争の先頭に長子として立たざる得なかったのが、我々のマックス・ヴェーバーであった。

まずいくつかの問題が子供達と父親との間でくすぶり始めた。ひとつは息子カールの家庭教師の問題であった。この息子はヴェーバー家ただ一人の御調子者の非行児であった。そのために一人の神學生がカール専任の家庭教師として家に招かれた。この神學生は非常に素直な性格の持ち主で、息子達からも歓迎されたし、何よりも母ヘレーネは自分の宗教的関心を共有してくれる若い魂を見つけた。しかし夫にとってこれは我慢出来ないことであり、彼はこの神學生を解雇した。このことは年長の息子達の憤激を生んだ。いまひとつは、母親の休暇に父親が付いて来ようとしたことであった。父親がいては、母親の休暇にならない、それが息子達の意見であった。しかし、父マックスの立場からすれば、当時の家父長的な時代の人間として「妻の休暇の期間と限度は自分が決める権利をもっているのだ」という考えを、彼はどうしても克服することが出来なかった」（『伝記』：184頁）。さらに、「妻が自分には縁のない興味を他の者と分かち、親密な感情の交わり——彼自身はそれから除け者にされているように感じた——を保っていることには、相変わず何としても同意することが出来なかった」（『伝記』：184頁）。自

分だけが家族から除け者にされているという感情は、確かに夫マックスとしては抱いたであろう。我々が興味を抱くのは、この時の母ヘレーネの動きである。マリアンネは次のように述べる。

「ヘレーネには自分のしたいことを委細かまわずやっ
てのける力はなかった。つむじを曲げることは彼女には
生来出来なかった。そして自分の望みということになると、
夫に何を求めているのか彼女は決して分からなかった」
（『伝記』：184頁）。

この記述はあまりにもヘレーネを免罪した記述と言わざる
得ないであろう。我々はヘレーネというこの女性が、
どれだけの行動力と克己心を発揮する女性であるかを、
そして、そうした克己心をどれだけ他人にも求める女性
であるかを、夫の死後の彼女の動きから知っている。ま
してや「自分の望みということになると、夫に何を求め
ているのか彼女は決して分からなかった」などという愚
かな女性では決してなかったことも知っている。要する
に、自分の責任で夫と対立することから彼女は逃げ、対
立は息子にさせたのである。『伝記』は続く。

「約束は守られず、手紙で激した談判がおこなわれた—
結局、老ヴェーバーは妻と一緒にハイデルベルクへ
行った。おかげで子供達の家での彼女の煩わされること
のない休息は、短縮されるか、あるいは全くおじゃんにな
ってしまうように見えた」（『伝記』：184頁）。

ヴェーバーは母から課せられたその役を見事に果たした。
家族たちを前にして、母を弁護し、父親を鋭く弾劾し裁
いたのである。『伝記』はその様子を次のように描く。
「この時、長いことくすぶっていた不幸が爆発したので
ある。息子は鬱積していた憤懣をもはや抑えることが出
来なかった。溶岩は砕けた。途方もないことが起こった。
息子が父親を裁いたのである。女達のいる前で審判がお
こなわれた。何人の声も彼を引き止めなかった。彼は何
一つ良心にやましいことはなかった。あらゆる家庭内の
難問題の今までのような穏便な処理にけりをつけるこの
爆発に身を任せながら彼は気持ちが悪くなった」（『伝
記』：184頁）。

その直後、父は友人と旅行に出かけ、旅行の途中で亡
くなり、遺体となって家族の元に帰ってきた。ヴェーバー
は葬儀においても冷静であった。

「光り輝く八月の或る日、霊柩台が庭の芝生の上に立っ
た。ヘレーネと全ての子供達はその周りに集まった。この
終焉の恐るべき悲劇性を、年少の子供達は漠然と、年
長の者達は明瞭に意識して感得した。しかし長男は自責
の念に打揺さぶられることはなかった。七週間前におこ
なわれたあの対決は、この柩の前に立ってみても、避け
得なかったものに見えた。長い年月ののち、感情にとら
われぬ距離を置いて初めて彼は自分が悪かったと言った

——事柄そのものではなく、その形式において。彼の態
度はヘレーネにも自信を与えた」——（『伝記』：186頁）。
彼の精神疾患が始まるのは、その約半年後であった。

IV. 精神疾患

マックス・ヴェーバーの父マックスとの衝突、および
その約半年後に現れた彼の精神疾患は、成功し過ぎた父
親殺しの反動として従来理解されてきた。その最も代表
的なものは、アーサー・ミッツマンによる『鉄の檻』で
あろう。ミッツマンはそこで東エルベ側東岸の農業労働
者事情を調査した一連のヴェーバーの論文を取り上げ、
そこでドイツ人労働者が大地主〔正しくはユンカーと呼
ぶ〕による家父長的専制支配を嫌い、土地を捨て、ドイ
ツ南部へ労働者として流出してしまっていること、その
代わりとして大地主達は労賃の安いポーランド人を雇い
入れていること、このことによってドイツ東部のポーラ
ンド化が進んでいることを警告し、ドイツとポーランド
との国境閉鎖を進言しているヴェーバーの研究におい
て、「自由の魔力」という言葉を使って大地主達の家父長
的専制支配よりは不安定な労働者への道を選ぶドイツ人
労働者のことを説明していることを取り上げ、そこには
家庭内で大ブルジョアに典型的な家父長的支配者であ
った父マックスへの憎悪が込められている、と論じている。
確かに東エルベ川流域のドイツ人農業労働者による専制
支配からの自由を求めての移動に関する叙述とヴェー
バーの家庭内の状況とが相似していたこと、息子マッ
クスによる父マックスに対する憎悪がそこに反響してい
ることは、説得力を持ってミッツマンは論証している。但
しこれは父の死以前の発病前のことである。発病後の、
特に『倫理』論文に関する分析になると、ミッツマンの
論証は混乱してくるのである。

この病気の原因は果たして父親なのであろうか。マッ
クス・ヴェーバーの発病は三十三歳の時である。彼がよ
うやく安心して講義が出来るようになるのは、五十五歳
の時である。（その前年の五十四歳の時、ウィーン大学で
夏学期試験的に講義をしているが、その時の講義前日、
睡眠薬の用意を忘れ、眠れないのでは…という不安から、
気の毒で見えられぬほどのパニック状態を起こした様
子は後に見る。）残念ながらその翌年の1920年、五十六歳
で、肺炎を見逃した医師の誤診のためヴェーバーは世を
去ってしまう。したがって、それ以後、講義をすること
に対してヴェーバーがどのような反応をしたであろう
か、ということは全く分からない。しかし、三十三歳か
ら五十五歳までの二十二年間もの間、父親を裁き、結果
として父は遺体となって帰ってきた、という事実によ
って、そんなにも長い間、人は苦しむであろうか。たとえ

仮に苦しんだとしても、そのために講義が出来ないというような状態までなるであろうか。

例えば安藤英治は、ヴェーバーが後年に至るまで父への罪の意識を抱いていたのでは、という推測を持って、当時ドイツでまだ生き残っていたヴェーバーと親しかった人々を訪ね歩き、インタビューを試みた。ところが、安藤の推測を真っ先に否定したのが、マックス・ヴェーバーの最初の女性の弟子であり、後にはヴェーバーの愛人ともなったエルゼ・ヤッフエ³⁾であった。

「でも、彼が一生、罪の意識を引きずっていたとは、私は思いませんね。彼は、徐々にそこから解放されていったと思いますよ。いや、やはり引きずってはいなかったでしょう。でもそれは私見ですが。」(安藤英治『回想のマックス・ヴェーバー』：15頁)

これが安藤に彼女が与えた答えであった。エルゼは晩年のヴェーバーに関しては妻マリアンネ以上の知識を得ていたと思われる。そのエルゼが安藤の質問に対して言下に否定しているのである。

しかも後年になって彼は、当時のあの事件のことをきちんと自己分析出来ているのである。以下は末弟に宛てたヴェーバーの文章の一節である〔この部分『伝記』の記載は混乱しており、引用直前では末弟に宛てたものと書いているのに、引用の末尾ではマリアンネは「彼が母の満七十歳の誕生日に彼女に与えた、彼女の夫婦生活の運命と父の性格についての感情にとらわれぬ解釈」と記している。どちらが正しいのかは分からない。〕

「あの頃はたしかに誰もがひどくまずいやり方をした。特に私のやり方もひどかった。しかしあの問題に関する限りお母さんは自分の天性と自分の良心に従うほかはなかったのだ。もしお母さんが間違っていたとしたら、委細かまわず自分のやりたいことを実行しなかったという間違いだった——そうしていればお父さんも、何といってもお母さんに愛着があったのだから、お母さんのやり方やお父さん自身にはなかったお母さんの特別の関心(宗教的、また社会的な)に慣れただろう……」(『伝記』：186頁)。

これはきちんとした自己分析が出来ている文章と言わざる得ず、父の死がヴェーバーにとって晩年に至るまでのトラウマとなっていたとは考え難い。

あるいは、父の死を切っ掛けとして精神分裂病(現在では「統合失調症」と呼ばれている)を発病したというならまだ分かる。父への弾劾とその死は発病の単なる切っ掛けであったに過ぎない、と。だがヴェーバーの症状はどう見ても分裂病のそれではない。幻覚も妄想も独語も空笑もない。恐らくは単なる鬱病ないし鬱状態であったであろうと思われる。しかも、それは新聞での激しい論争や裁判沙汰や講演は見事なほどにやってのけら

れるのに、毎週毎週時間の決まっている講義に対してだけは異常なほどの恐怖を抱く、という奇妙な鬱病である。言い換えよう。大学教授として行うべき講義という「職業としての学問」に対してだけは異常なほどの恐怖を抱く、という奇妙な鬱病なのである。

答えは『倫理』論文にある。そこで彼は、自分の精神疾患の原因が何であるかを述べているのである。

V. 病状

ヴェーバーの精神疾患の始まりの様子をマリアンネは次のように描いている。

「葬式のしばらくのち、夏の終わり頃、ヴェーバー夫妻はスペインへ旅立った。夫の方は精神と心情の緊張緩和を必要としており、新奇な印象の魅惑のうちにそれを見出したのであるが、今度もまた彼はそれらの印象を母への委曲をつくした手紙のなかに書き留めている。…ヴェーバーは怒りっぽく、交通機関の煩瑣なやり方にひどく腹を立てたが、しかし今度も新しい印象に対して貪欲に心を打ち開き、異種の世界の最も魅力的な側面を見て取る柔軟性を持っていた。ただ、いつも新しい印象を追って行こうとする落ち着きのなさを、彼自身神経の疲弊の徴候と解していた」(『伝記』：186頁)。

この時出した母宛の手紙に次のような一節がある。「あまりにも多くの印象に次々に接して行くことは、普通の状態ならばおそらく好ましいことではあるまいとあなたが書いてきたのは正しいのです。しかし仕事することが出来ない限り私はひとつの場所に辛抱していることは出来なかったでしょう。…強力な印象が溢れんばかりに自分の上に働きかけるに任せ、そうすることで差し当たり神経を完全に強め、あらゆる体験の客観的な消化に耐えられるようにする以外にはありません。今、それに成功したように私は思います——」(『伝記』：186頁)。

さらに『伝記』は次のように続く。

「帰国する時になって緊張したオルガニスムスは病気を引き起こした。ヴェーバーは発熱し、何かに脅かされているように感じた。…けれども大学のゼメスターのための仕事が始まるとすべては旧に復したように見えた。——ヴェーバーはすべての職業上の義務を果たし、講義に手を加えて完全なものにし、特別熱心に弟子達の勉強のために献身した。…そうするうち、——仕事の山積した学期末に、意識されぬ生命の深部から何か恐るべきものが彼に向かって爪を伸ばして来た。或る夜、一人の学生の試験のために例によって精魂をすりつくして来たあとで、頭の猛烈なほてりと強い緊張感とともに疲労困憊が彼を襲った。ゼメスターは終わったが、異常はそのまま続いた。ヴェーバーは危険が迫っているように感じて

医者診察を受けた」(『伝記』:187頁)。

マリアンネが「緊張したオルガニスムスは病気を引き起こした」と述べている意味は我々には分からない。「頭の猛烈なほてりと強い緊張感とともに疲労困憊が彼を襲った」という記述も、どういう状態であったのかは分からない。医者は彼の変調を軽く取り、夫婦に旅行を勧めた。レマン湖畔に行ったが、その年の湖畔はまだ寒かった。ヴェーバーは肉体的疲労によって精神の緊張を取ろうと考え、しきりに歩き回った。ヴェーバーはこれでも自分は回復するだろうと考えた。以下は次のゼメスターが始まった時、彼が母親宛に書いた手紙の一節である。

「滞在はそれでもやはり非常に有益でした。また元気に仕事を始めた今、その効果が分かり、二三週間のうちに最後の名残も消えるだろうと思います。明らかにそれは回復期の現象であるだけになおさそう思うのです。なぜなら、或る特定の頭の神経の緊張と軽い充血の他は、肉体的にも精神的にも全く特別に快適に感じていましたし、今またますますそう感ずるからです…」(『伝記』:188頁)。

ヴェーバーの楽観視はすぐさま裏切られた。『伝記』は伝える。

「しかし二三週間知的労働を続けると、睡眠が——普通ならいつも仕事の多い日の彼の回春の泉だったのだが——取れなくなり出し、機能障害が起こってきた。ヴェーバーは病気だと感じた。…彼は疲労困憊し、彼の頑健な体質も揺らぎ、涙が溢れ出た。ヴェーバーは或る転回点にさしかかっているように感じた。あれほど長い間無理に押さえ付けられていた自然の本性が復讐を始めたのだ」(『伝記』:188頁)。

「マリアンネがここで「機能障害」と述べているのが何を意味しているのかも不明である。インポテンツという説もある。ヴェーバーのこの“精神疾患”の症状については後で扱う。」

医者は患者に冷水療法を命じた。しかし、それは却って患者の興奮を高め、患者から完全に睡眠を奪ってしまった。夏休み、医者はヴェーバーにサナトリウムに入院するよう勧めた。ヴェーバーは素直に従った。ボーデン湖畔の超満員の落ち着いた施設でヴェーバーは一二月を過ごした。そこで当時の時代の奇妙な精神療法でヴェーバーは治療された。

「しかしそれも結局、彼のただ一つ熱望していた規則的な夜の休息と緊張の緩和とをもたらしことに成功しなかった時、彼は他の何よりも自分の職務からのかなり長い休息をひそかに望んだ。しかし彼はそのようなことを一言も言わなかった——なぜなら『自分に賜暇が与えられるようにすることはやはり出来なかった』から」(『伝

記』:188頁)。

ここで注意すべきは、ヴェーバーが大学教授という自分の職務からのかなり長い休息を内心願っていた時、彼がそれを口に出して言うことが出来なかったということである。「自分の職務からのかなり長い休息」とは、自分の“職業”からの落伍を意味するのである。[これがどういう重大な意味を持ってくるのかに関しても後で論ずる。そして、これが本稿の主題ともなってくる。]

秋のゼメスターが始まった。

「誰もが彼を病気とは見ようとしなかった。しかし数週後、神経が再びいうことを聞かなくなり、教えることが——講義時間の一つ一つが実際自由な創造であったのに——苦しみになった」(『伝記』:188頁)。

この精神状態で、多人数を前にして講義をすることなど到底不可能であったであろうことは、今実際に大学で学生を前にして講義をしている筆者には十分理解出来る。講義とは学生達を前にした一種のライブである。ライブを上手くこなすには、聴衆である学生達を呑んでからなければならぬ。学生を呑むことが出来なければ、学生を惹きつけることも出来ないのである。ヴェーバーのこの精神状態ではそれは無理である。

この時期、ヴェーバーは妻マリアンネ宛てに手紙で次のように書いた。

「このような病気はそれなりに好ましいところを大いに持っています。——たとえば僕に対しては、お母さんがいつも僕にはそれが分からないといって少々残念がっていた人生の純粋に人間的な面を、僕が今まで知らなかったような程度にまで打ち開いてくれた。僕はジョン・ガブリエル・ボルクマンとともに、『氷のように冷たい手は私を放した』と言えるだろう。なぜなら僕の病的な素質は今までの歳月の間、それが何から自分を守るものかは分からなかったが、何かの護符にしがみつこうように学問的な仕事に癡癡的にしがみつこうということに現れていたからだ。今思い返してみてもそれはあまりはっきりしていない。分かっているのはただ、病気であれ健康であれ僕はもうあんな風にはならないだろうということだ。仕事の重荷のもとに打ちひしがれているような気持ちがしないとやり切れないという欲求はなくなってしまった。僕は何よりもまず、僕の『赤ちゃん』[妻に対する愛称——訳者注]と一緒に人間的な生活を十分に味わい、そして自分がそれを味わっているのを僕として可能な限り幸福な気持ちで見たい…」(『伝記』:189頁。強調は引用者)。

ヴェーバーはこの時まだ、この病気がこの後二十年以上にもわたって自分を苦しめる病気の始まりに過ぎないことに気づいていなかった。

さて、上記の引用部分で気になるのは、「僕の病的な素

質は今までの歳月の間、それが何から自分を守るものかは分からなかったが、何かの護符にしがみつこうように学問的な仕事に癡癡的にしがみつこうということに現れていたから」という記載と「仕事の重荷のもとに打ちひしがれているような気持ちがしないとやり切れないという欲求はなくなってしまった」という記載であろう。何かから自分を守るために学問的な仕事に癡癡的にしがみついていた、学問の仕事は何かから自分を守るためのお守りだった、と言っているのである。では、この男はかつてどのようなやり方で学問の仕事をやってきたのであろうか？それが次の疑問となる。

VI. 学問への癡癡的なしがみつ

この男がかつてどのような仕事の仕方をしていたかを妻は書いている。

「講義を終えてすぐフランクフルトへ行き、夕刻そこで講演し、夜〔フライブルクへ——引用者注〕帰宅し、翌早朝デスクに座ってその日の問題の準備をしながら日の出を見るということもあった。——彼の仕事の力は倍加したように見え、どんなこともやってのけた。普通午前一時まで仕事をし、それからすぐ深い眠りに沈む。妻が注意すると彼は言った。『一時まで仕事できなければ、教授を勤めることもできないよ』第三ゼメスターの終わり——1896年春——には、彼は自分が新しい教授科目を完全にこなしていき、肉体的にも特別健康だと感じた」（『伝記』：162頁）。

但し、この——言わば——働く機械自身が、かなり綱渡り的なことを自分ではしているという漠然とした予感をそれ以前の段階で既に抱いていたらしいことは、それ以前の『伝記』の記載から分かる。

「ヴェーバーのベルリンでの暮らし方は時々女達を心配させた。あれほどまでに仕事を抱え込むことが実際に必要なのか？教職——講義と演習でおよそ十九時間——だけでも相当の努力を必要とした。特に高名の恩師の代講をする若い教授として早速司法国家試験のための審査に関与しなければならなかったからである。その上にまた有り余るほどのみずから進んで引き受けた仕事！…」（『伝記』：157頁）

当時マリアンネは姑のヘレーネ宛にも夫の仕事ぶりを手紙で書いている。

「…彼は仕事で身動きもできぬほどで、恐ろしいほどひっそりとしているので、私は彼の邪魔をしてはならないという気がします…」（『伝記』：157頁）。

ところがこの働く機械自身が、自分の機械の運転の調子に関してこの時期、妻マリアンネ宛に妙なことを書いているのである。マリアンネは『伝記』で次のように述

べる。

「それから数カ月のちに、彼が働き過ぎており、彼の暮らし方は不健康ではないかという憂慮を妻が手紙で彼に表明した時、ヴェーバーはいろいろと説明して彼女を安心させようとしているが、その非凡な実行能力にもかかわらず彼が神経的に時々非常な苦痛を覚え、決して完全に安心できるとは思っていないことがその説明から分かる」（『伝記』：157頁）。

その説明とは以下のヴェーバーの手紙である。

「全体の健康状態ではこれまでの数年とは比較にならぬほど良好だが、これは僕が——ずっと年を取ってからのは別として——もはや期待していなかったことだし、この面からすれば僕にとって心配の多かった我々の婚約時代にも信じていなかったことだ。何とも不愉快な性質の苦悩が幾年も続いたあげくやっと内面から平衡を得てしまったから、僕はひどい抑鬱が来るのではないかと恐れていた。僕の考えでは、持続的な仕事によって神経組織や頭脳を休ませなかったがために、抑鬱は来なかったのだ。それやこれやの理由で——仕事への生まれつきの欲求は全然別として——僕は実際にそれと感ぜられるような休止を仕事の中に置くことをひどく嫌ったのだ。回復の段階が決定的に終わってしまったと明瞭に認められない限り、おさまりにかけた神経の安定——なぜならば僕はほんとにそれまで知らなかった幸福を感じながら神経の安定を味わったのだから——を弛緩に変えてしまう恐れのあるようなことをしてはならないと信じている」（『伝記』：158頁。強調は引用者）。

まるで機械が自分の歯車の回転の調子を自ら報告しているようなこの奇妙な手紙は一体何を示しているのだろうか。この男が言っているのはこういうことである。

「持続的な仕事によって神経組織や頭脳を休ませ」てしまった場合、「抑鬱が来る」恐れがあった、ということ。また、神経の「回復の段階が決定的に終わってしまったと明瞭に認められない」うちに、神経に休止を与えることは「おさまりにかけた神経の安定を弛緩に変えてしまう恐れ」がある、と。

もう一つ妙な手紙がある。1893年、結婚直前の夏休み、婚約者マリアンネ宛に書かれた手紙である。ヴェーバーは29歳であった。まずマリアンネは当時のヴェーバーがどれだけの量の仕事を抱え込んでいたかを報告している。

「ヴェーバーはこの時代にはまだ膨大な苦役を抱えていた。講義、福音社会会議のための農業労働者についての新しい調査、秋の牧師のための農業政策に関する講習の準備、山のような批評、その他。それゆえ彼は、毎年の夏とおなじように家の者が出払ってしまうのを喜んだ」（『伝記』：152頁）。

問題はその後引用されているヴェーバーの手紙の中の言い回しである。

「これで間もなく全然一人だけになってしまえるものと期待している。このことがいつも僕に与える影響たるや奇妙なものだ。数ヶ月来僕に付きまっていた仕事への嫌厭が消え失せ、今日は生理学的心理学百頁、認識論百頁、それからイタリア語の法律学論文を一つ読み、しかも頭の中がごったまぜにもならず、大体においてこしばらくなかったほどの精神的能力を取り戻している。——これは、僕のような年配ではもう人間は両親の家に属するものではないということの結果ではないだろうか？」（『伝記』：152頁。強調は引用者）。

家族がいなくなると「数ヶ月来僕に付きまっていた仕事への嫌厭が消え失せ」た、とこの男は述べているのである。この男自身は、それがもう自分が両親から独立して家庭を構える年代になっていることの現れだ、と単純に解釈している。但し、ここで妙なことがある。家族がいると気が散って仕事の能率が上がらない、一人になって清々した、という発言なら理解できるのであるが、ここでこの男が言っていることは——この男自身も気づいていないが——そういう単純なことではない。家族がいると「仕事への嫌厭」の念が「数ヶ月来僕に付きまっていた」と述べているのである。なぜ家族がいると「仕事への嫌厭」の念が強まるのであろうか。「仕事への嫌厭」の念を強めているのは、では家族内の誰なのか？

ここで一つ確認しておきたいことがある。マックス・ヴェーバーというこの男は学者になりたかった男ではない、ということである。学問などというものは暇人の余暇の産物にしか過ぎない、男子たるもの、より実践的な職業に就くべきであるという観念を、この男は終生抱いていた。

「私は本来の意味での学者では決してない。分業というものの当然の帰結として、学問的活動も全人格を投入してこれをおこなわなければ成果を挙げないということをどれほど認めていても、この学問的活動なるものは私にとっては余暇の利用という観念とあまりにも密接に結びついてしまっているのである」（『伝記』：131頁）。

二十九歳で既に三冊の著書を持ち、前途洋々たる学者としての未来が開けていたこの時ですら、この男は学者という職業が自分にふさわしい職業であるとは思えなかったのである。教師達は彼こそは学者になるべき人物であるとそろって判断していた。伯父のヘルマン・パウムガルテン〔母の姉イダの夫で著名な歴史学者〕は早く大学教師になれと口やかましく言ってきていた。但し、この男自身は、より闘争的で実践的な生活を望んでいたのである。彼は弁護士になりたかった。法律家としての準備期間の終わり頃、数ヶ月ベルリンで或る有名な弁護

士の代理をつとめたことがあった。法廷での闘争は彼には魅力的であった。

「…明敏さと決断能力と闘争本能を同時に要求するこの活動に彼は非常な満足を見出し、大学教授資格を取ったあとでさらにそのかわり弁護士の業につこうともくろんだほどであった」（『伝記』：129頁）。

彼は最後に学者というこの職業からのしがらみを断ち切ろうとする真剣な試みをおこなった。プレーメンで法律顧問の地位を得ようと必死に求職活動をし、当地まで行って市の有力者達にも会ったのである。しかし、結局失敗した。蓋を開けてみると、その土地の者が採用されていた。正にその時に、皮肉にも突然大学教師への道が開けたのである。恩師ゴルトシュミットが病に倒れ、ヴェーバーに代講を頼んだのである。彼は、彼の意志に反して、学者という職業に押しやられてしまったのである。彼はただちに助教授にされた。この偶然のために彼は、もう父親の世話にはならず——父親とは既に家庭内で気まずい敵対関係にあった——一人前の男として自分の食いつ持は自分で稼ごうという年来の希望を満たすためには、もはや大学教師になるしかなかったのである。歴史に「もしも…」ということはない、と言われるが、もしもヴェーバーが弁護士になっていたとしたら、彼は果たして発病したであろうか。頭脳明晰で弁も立ち、相手方の論拠の弱点を目ざとく狙い、すかさず襲いかかる…弁護士としてはきわめて攻撃的で有能な弁護士になったであろう。何よりも彼自身も持て余すほどに過剰にあった闘争本能を、職業という形で発散することが出来たであろう。弁護士として名を上げ、いずれは代議士として打って出る、これがこの男の正しい人生行路であったのではないのか。ヴェーバーの現実政治における政治的判断能力は極めて卓越したものであったと言わざるを得ない。これはほとんど生得的なものであって、この能力を十全に生かし切ることの出来る職業に就けなかった、ということが、この男にとっての何よりの不幸であったのでは。そう思うのは筆者だけなのであろうか。

実現出来なかったこの男の夢のあとを追ったとしても、今さら意味はないのかもしれぬ。我々は現実に戻ることにしよう。

VII. 母

マリアンネの『伝記』はよくよく考えてみると妙な伝記である。夫の精神疾患をここまで赤裸々にした伝記も珍しい。『伝記』の縦軸になっているのは夫の精神疾患の歴史なのである。すでに周囲に知られていることであったので『伝記』で多少は触れざるを得なかったとしても、普通ならば、少しほのめかす程度でそれ以上は隠すもの

である。一体彼女は何のために夫の精神疾患に関してここまで詳細な叙述をする必要があったのであろうか。

マリアンネの『伝記』を読む時、漠然と感じるのは、これは夫ヴェーバーをめぐる姑ヘレーネに対する嫁マリアンネによる最後の闘争である、という妙な印象である。誰が夫を精神疾患になるまで追い詰めたのか、それがこの膨大な『伝記』を導いている主題である。ヴェーバーはマリアンネと結婚したにもかかわらず、妻と性関係を結ぶことがついに出来なかった。マリアンネ以外の女性とは性関係を結ぶことが出来たにもかかわらずである。エドゥアルト・バウムガルテンからヴェーバーの愛人エルゼ・ヤッフェ宛のヴェーバーの手紙を見せられた時、ヤスパース⁴⁾が亡きヴェーバーに対して騙された、と思って抱いた怒りは確かに当然なものであったであろう。妻とセックスが出来ず、夢精をしてしまう恐怖から不眠症になっていることを訴えていたはずの男が、マリアンネ以外の女性とは浮気し、セックスも出来ていたのだから。

但し、ここで考えるべきは、マリアンネ以外の女性であったからこそセックスすることがヴェーバーには出来たのでは、という可能性である。つまりセックスに対する禁止はマリアンネに対してだけ向けられていたということである。その人物にとって、よもや、あのヴェーバーが他の女性とセックスすることまでは視点に入っていなかったのである。正妻マリアンネとの性関係を結ぶことだけがヴェーバーには禁じられていたのである。結婚とは露骨に言うならば、今後私はこの人と性関係を結びます、ということを世間に宣言する儀式である。息子とマリアンネとがセックスする場面を思い描いた時、もっともおぞましい嫌悪感を抱いたのは、では誰であったのであろうか。

以下は推測にしかならぬが、結婚しても妻マリアンネと性行為が出来なかったというヴェーバーの症状を理解する上で、参考になるかもしれぬことがある。母ヘレーネが結婚に伴う性交渉に対して抱いていた強度の嫌悪感である。マリアンネは次のように書いている。

「…ともあれ、夫婦の共同生活の肉体的側面は彼女にとって喜びの源泉ではなく、苦しい犠牲であると同時に、子供を生むということによってのみ是認された罪であった。それゆえ、彼女は若さの幸福のただなかにあって、この『奉仕』から解放される時期としてしばしば老齢を憧れたのであった」(『伝記』：26頁。強調は引用者)。

マリアンネはここで三つの理由を推測している。

「母が非官能的であったようにそれが彼女の生まれつきの性質だったのか、あるいは彼女の宗教的感情がそうということに対して彼女を反発させたのか、あるいは思春期の苦しい体験のおかげで人生のこの部分が彼女にとっ

て永遠に汚らしいものとされてしまったからか…」(『伝記』：26頁)。

着目すべきはマリアンネが三番目の理由としてあげている、“人生のこの部分を永遠に汚らしいものとしてしまった思春期の苦しい体験”であろう。彼女が娘時代、家の二階に父の友人である古典学者のゲルヴィーヌスが住んでいた。

「彼は父の友人だったが、父の死後は娘達にとって父に代わる友となり先生となっており、彼女等は夢中になって彼を崇拜していた。彼の妻も、娘達には人並み優れた人柄として映る人物の一人であった。子供のない夫妻はとりわけヘレーネを自分達の身近に引きつけた」(『伝記』：17頁)。

ところが父の友人であったはずのこのゲルヴィーヌスがある日、まだ初々しい思春期の娘に過ぎなかったヘレーネに性的欲求を抱いてしまうのである。『伝記』は次のように続ける。

「彼女は当時十六歳、淑やかな、まだ全然固く閉ざしている花のつぼみのような少女に過ぎなかったのに、ある日、自分の尊敬し、父親のように愛着し、何年も前から信頼を寄せていた教師が、狂気の沙汰をひきおこすということになったのだ。老年に入ろうとしている男は何も知らぬこの娘に、もはや抑制することの出来ない情熱の炎をにわかに降り注いだ。恐怖、嫌悪、同情、そして慈父のような友人であり教師である人への敬意がこもごも彼女を拉致し去り、そして彼女は神経的に傷つきやすかったから——死の間際まで押しやられたのである。ヘレーネはこの時の印象を決して忘れ得なかった。この時から彼女にとって情欲は罪深い獣的なものとなった。老いて後もこのことを思い出すと彼女の顔には恐怖の色が浮かんできた」(『伝記』：17-18頁)。

ゲルヴィーヌスの行為はそれだけに留まらなかった。

「逆上した男の方も、その後もなおヘレーネから信頼されている、いや、彼女の魂と運命を支配する当然の権利が自分にあるものと思った。彼女が短期間別れていた後に再び以前と同じ天真爛漫さで彼の元に戻って来ることを彼は期待した。彼はまた、自分の弟子の一人を彼女の夫に予定して、彼女の将来までも左右しようとした。しかしそうはいかなかった」(『伝記』：18頁)。

ヘレーネはベルリンで歴史家ヘルマン・バウムガルテンに嫁いでいた姉イダのところへ逃れる。そこで運命的な出会いをしたのがマックス・ヴェーバーの父であった。

「この二十四歳の男は伶俐で前途有望で、その陽気な愛想の好さ、生きる喜び、すっきりとした純粋さとあふれるような温かさによって非常に魅力的だった。心と心はたちまち触れ合った。ヘレーネはまだようやく満十六歳半だった。双方の若さのために諸方から疑惑を持ち出さ

れたにもかかわらず、二人は知り合ってから数週間後に生涯の契りを交わした。公表していない許婚者となってヘレーネは両親の家に帰った」(『伝記』：18頁)。

これを知ったゲルヴィーヌスは激怒する。

「父の友人〔ゲルヴィーヌスのこと〕がこの出来事に示した反応はまたもや堪えがたい苦悩を彼女にもたらし、婚約後初めて彼を訪ねた時、彼女は度を失った彼を見出したのであった。それに続いて絶望と憤怒の激しい爆発が起こり、彼は彼女に忘恩を語り、彼女が自分が考えていた縁組の計画を出し抜いて自分をだましたと非難した。ヘレーネはもはや堪えられないと感じた」(『伝記』：19頁)。

『伝記』は姉イダ宛の当時のヘレーネの手紙を引用する。

「もし私のマックス〔父マックス・ヴェーバーのこと〕とお母さまとあなたが現在いなければ、小父様〔ゲルヴィーヌスのこと〕と私との間が一挙にして完全に片づくように私はネッカー河に身を投げるだろうと思います…」(『伝記』：19頁)。

父マックス・ヴェーバーはこういう闘争には最適の男であった。『伝記』は次のように述べ、父マックス・ヴェーバーの手紙を引用する。

「ヴェーバーはこのような事態にも屈しない力を持った人間であり、この困難な危機を許婚者と共に堪えることを厭わなかった。彼は彼女が完全に信頼出来るように実際振舞った。

『君とゲルヴィーヌスとの関係を君の口から出来るだけ多く聞いたら、僕にとって有り難いことだ。すべてを君と共に堪えることを僕は真に熱望している…』」(『伝記』：19頁。強調はマリアンネによるものか、あるいは、父マックス・ヴェーバー自身が手紙で強調していたのか否かは不明)。

さて、本題に戻ろう。問題は、マックス・ヴェーバーが既にマリアンネとの結婚当初から妻と性的行為が出来ないという異常な面を示していたことが、母ヘレーネの結婚に伴う性的交渉という妻としての義務への強い嫌悪感と何らかの関係があったのか、ということである。一つヒントとなるのは、放埒としか言いようがなかった自分の学生時代を振り返って、母ヘレーネ宛てにあてたヴェーバーの手紙である。

「…僕は今までの大学生活の間、今では僕自身非常に軽率だったと分かるようなことを色々してきましたが、決して悪いはずはありませんでした。そして——その当時も今もまだこんなに若く、しかも誘惑は往々にして身近にあったにもかかわらずそういうことをしなかったのは、それをしようとする時いつもお母さんのことを考えたからです」(『伝記』：75頁。強調は引用者。手紙の年代

は記載がなく不明)。

“若かったがゆえに誘惑が往々にして身近にあった悪いはずら”というのが、売春宿通い等のことを述べているのであろうということは推測される。そして、この手紙の引用に続けてマリアンネは次のように言う。

「そうだ、この若い学生は大学生生活の荒っぽい放縦さにうつつを抜かし、大酒を飲み、必要とするよりも、また両親が予想したよりもはるかに多くの金を使い棄てた。そしてシュトラースブルクにはそれ以上の欲望をも野卑な、無責任で無趣味な形で満たしている仲間達もいたのだ。しかし母親は感謝してよかったろう。言葉によらずに——というのは、当時の人間は自分の生活の暗い裏面やそこにはられる不気味な問題などは固く押匿していたのだから——もっぱらその人格の神々しいまでの清純さによって、彼女は本能的なものに対する確固たる自制を彼に植えつけてしまっていたからである。彼は他の連中の手本に従わなかった。当然の欲望に身を委ねるよりも、たくましい肉体から来る精神へのデモニッシュな誘惑に敢えてますます身を苛む方を取ったのである」(『伝記』：75頁。強調は引用者)。

この嫁は性交渉のなかった夫との結婚生活を振り返って、夫が「本能的なものに対する確固たる自制」を母である姑によって「植えつけてられてしまっていた」のである、と書いているのである。妻である自分とは性関係を持っていないという夫の異常さ——文字通り去勢された男である——に気づいた時、マリアンネはそれが誰の呪縛によるものなのかも、恐らくは気づいたのであろう。

いまひとつ奇妙なことがある。1919年10月14日、「ちょうどヴェーバーが冬のゼメスターを始める直前にヘレーネがその生涯を閉じた」(『伝記』：500頁)とマリアンネの『伝記』は述べる。問題は、母ヘレーネの死後のヴェーバーと講義との関係にある。これはこれまでヴェーバー研究者の誰からも注目されてこなかった事実なのであるが、ヴェーバーは何と、母の死後、講義が出来るようになるのである。『伝記』からその部分を引用しよう。

「その後ヴェーバーの冬の仕事が始まった。彼は自分の最初の意図とは全然反対に、彼の範疇論が難し過ぎるといふ学生達にせがまれて、世界社会・経済史の概要を講ずることにした。つまり、取り扱う範囲の途方もなく広い新しい講義を始めたのである。そのための知識は大体彼は持ち合わせていたが、構成は独創的でなければならず、そしてまたさまざまな新しい研究成果も顧慮しなければならなかった。講義は最大の講堂でおよそ六百名の聴講者を前にしておこなわれた。彼はひっきりなしに、この講義のために色々なことをしなければならなかった」(『伝記』：501頁)。

これは、ヴェーバーの死後、学生達の残されたノート

から再構成されて『一般社会経済史要論』という形で出版されたものを指していると思われる。邦訳もあり、確かにマリアンネの言うとおり、「世界社会・経済史の概要」に関する「取り扱う範囲の途方もなく広い」講義であり、にもかかわらず、構成は聞く者に分かりやすく明瞭に出来ている。ヴェーバーの問題意識の全体が非常に分かりやすく取り扱われており、彼の問題意識全体を簡潔に知りたいという読者には、筆者もまずこれを勧めるであろう。講義としても良く出来ている。但し、扱っている範囲は膨大であり、それを講義の形に学生にも分かりやすいよう噛み砕いて新たに作ってゆくことは相当な労力を要したと思われる。「彼はひっきりなしに、この講義のために色々なことをしなければならなかった」とマリアンネが書いているのはうなずけるのである。しかも講義をすることは、これまでのヴェーバーにとって最大のストレス要因であり恐怖の対象であったはずなのである。ところがヴェーバーはそれをやってのけてしまうのである。『伝記』は次のように続く。

「その上彼は社会学の演習を持っていたし、同僚達に頼まれて教員間のコロクヴィウムにも出ねばならなかった。この学問的交流は彼には非常な喜びを与えた。——彼の力はすっかり吸い取られていた。非常に用心して生活しなければならなかった。実際初めの何週間のうちは、職務を永続的に完全に履行する力が欠けているのではないかという不安に襲われたほどだった。その上彼の自尊心には、もう一つの経済学の講座まで背負い込んでいる同僚W・ロツツの仕事を全然軽減してやれないことが苦痛だった。彼は自分の正教授の地位をちょうどその頃制定されることになっていた『員外』教授の職に変えようと考え、そのための願書も提出した。それで彼の精神的な負担はなくなったが、回答は来なかった。それにクリスマス前にはもう彼も慣れてしまい、苦勞なしに教授の職務を果たし、だんだんと自信が増して来るのを感じた——ウィーンの時とは全然違って。それにしてもこれは大きな奇蹟だった——この第二の青春は、彼自身もそう感じていた。この調子で続くのだろうか？」（『伝記』：502頁）。

あれだけ講義を恐怖していたヴェーバーが、膨大な領域の資料を分かりやすくまとめあげねばならなかったこの講義に「慣れてしまい、苦勞なしに教授の職務を果たした」とマリアンネは書いているのである。これは一体どういうことなのであるか。「ウィーンの時とは全然違って」とマリアンネは述べている。ではその前年のウィーンの時はどうだったのであるか。

前年の1918年の夏のゼメスターに、ヴェーバーはウィーン大学の懇願を受け入れ、正教授としての役目を試験的に引き受けたことがあった。

「既にゼメスターの初めから、これではやっていけないという感じが彼の心にきざした」（『伝記』：452頁）とマリアンネは記している。超満員の大講堂での二時間半ぶっ続けの講義は、ヴェーバーをすっかり疲れ切らせた。講義の調子はまだ出て来なかった。明日、自分が果たしてきちんと講義が出来るかどうかという不安と緊張に、当時のヴェーバーがいかに押し潰されていたかということを示してくれるエピソードを、マリアンネは書いている。ウィーン時代の講義前日、翌日に控えていた講義の義務を前にしてヴェーバーがパニックに襲われた時の様子をである。

「或る休日夫妻はカーレンベルクへ楽しいハイキングをした。…二人は夕刻熱れた穀物畑の連なる丘を下って或る郊外町の電車のところまで帰ろうとした。しかしヴェーバーはそこへ着かぬうちに疲れ切ってしまい、突然不機嫌になった。それから彼は常用の睡眠薬の処方を薬局へ送っておくのを忘れていたのを不意に思い出した。さいわいその処方を彼は手元に持っていた。だが日曜日の夕方だった。知っている薬局は閉まっていた。二人はさらに歩き回って、夜間営業の番に当たっている別の薬局をようやく見つけた。ところがこの薬局はあらかじめ医師の確認を得ずに処方に従って調剤することを拒んだ。ヴェーバーは一人も医者を知らなかった。それにもう非常に遅くなってしまっていた。疲れ切り興奮して彼は絶望に陥った。翌日は大きな講義がある——勿論夜は眠れないだろう、翌朝は全然何も出来ないだろう……いや、何としても講義には堪え通せない——『あんな忌々しいハイキングなどやめればよかったんだし、やったところであんなに歩くなんてことをしなけりゃよかった——こうなったらもう必ず病気がぶり返す！』どのように気を静めようとしても駄目だった。十二時過ぎると彼は途方にくれ絶望した妻を残して引き上げてしまった。——そのうち思いがけず妻は、自分の睡眠薬がまだ幾錠か残っているのを見つけたのだ——何という救い！夫はたちまち不安の魔力から解放された。

彼の顔は和らぎ笑顔になった。これで彼は睡眠を得られるだろう。そして事実彼は眠り、翌日は教壇に立った」（『伝記』：454頁）。

結局ヴェーバーは、このゼメスターの半ばに辞表を提出した。あれほど雄弁に講演をし論争もしたヴェーバーが、こと講義に関することになると、ここまで異常なほど神経質になってしまう、ということはおおよそ考えられないことかもしれない。ただ、これが事実であったのである。

では、本題に戻ろう。ウィーン時代、ここまで神経質になっていた講義を、彼はなぜそのわずか一年後、やりこなせるようになったのであろうか。その後のマリアン

ネの『伝記』を読んでみよう。時々不安定になることはありながらも、徐々に、しかも確実に回復していったヴェーバーの様子が見て取れるのである。

翌1920年の春休み前〔あるいは、1919年の冬頃か。マリアンネの記述は時期がはっきりしていないことが多い〕の様子をマリアンネは次のように書いている。

「ヴェーバーは著述にまったく没頭していた。それは彼が教職に就いた最初の幾年かとほとんど同じくらいの集中ぶりだった。〈生活〉のためにはあまり時間がなかったが、しかし彼の仕事の能力はますます安定したものとなり、また薬によって無理に眠る必要もほとんどなくなった」（『伝記』：514頁）。

またマリアンネはヴェーバー自身が「私は三十年前と同じように仕事している、思想がこんこんと湧きだすのだ」（『伝記』：516頁）

と述べていたことを伝えている。

もちろん、こうした過度の精神集中の反動もまた来る。『伝記』は伝える。

「やがてヴェーバーはハイデルベルク滞在中の異常な集中の代償として強度の神経の疲弊を迎えねばならなかった。生活の秩序を完全に新しく建て直すことの困難は今強く意識にも上ってきた。…彼を訪ねて来る友人たちは彼の顔色の悪いのに驚いた。彼はまた神経的な心臓の発作についても語った。『機械が動こうとしなくなったのだ』彼は何をするともできずソファに横たわり、死の思いに取りつかれていた。…四月末には動揺は静まった。時計の針は再び規則的に動き、ヴェーバーは全力を挙げて著述に専念した（『伝記』：517頁）。

また妻マリアンネ宛の手紙には彼は次のようにも書いている。

「…講義には——もうそろそろその時機になる、あとわずか二週間なのだから——相変わらず感興が湧かない。しかし膨大な校正が出ており、『宗教社会学』の第一巻は原稿では完成し、校正は三分の二は終わっている。だから仕事ははかどっているわけだ」（『伝記』：519頁）。

以前ヴェーバーはヴィーン時代のマリアンネ宛の手紙で、「私はペンと演壇には向くようにできているので、教壇には向かない」（『伝記』：458頁）と述べていたことがあった。ペンも演壇も共に政治的主張のことである。血のたぎる政治的闘争には興味は持てても、大学教授としてやらねばならない講義は相変わらずヴェーバーにとって気が向かない職業であった。が、一応この時期、とにかく仕事ははかどっていることがこの手紙から分かる。

さらに次の手紙では次のように述べている。

「私はかなり張り切って仕事している。ただ講義の準備にはまだ本当に身を入れてはいない。しかしいずれそうしなければならない。睡眠もまた普通になっている。時々

エルヴァノール〔薬品名——引用者注〕だけは飲んでいただが。少々参っていた後で今はまた『上り坂』で、毎日明けても暮れても校正を読んで来、ほとんど一切が出来上がったのだが、ただ講義だけはやはり少々うんざりなのだ」（『伝記』：519頁）。

妻マリアンネ宛のその次の手紙では次のように書いている。

「これまで校正ばかりやっていて、〈その量たるやキログラムで量らねばならぬ!〉、それに反して講義の準備のほうは皆無だから。今度はその準備が始まり、聖霊降臨祭の間もずっと続けなければならぬ。実は徹底的な神経の疲労に追われているのだが、今はやっと正常に復し、安心して今後の事態を迎えることができる。全ての事態を。〔当時ヴェーバー夫妻は、突然亡くなった妹リリー⁵⁾のまだ幼い四人の子供達を引き取ることを考えていた。ヴェーバーはマリアンネが母になれることを喜んでいたが、自分達が子供達の良き両親になれるか否かという不安もヴェーバー夫妻にはもちろんあった。『全ての事態を』とはそれを指す。〕」（『伝記』：520頁）。

次の手紙ではヴェーバーは「調子は実によい」と言い出す。

「…好天の誘惑に抗し、今は健康もすっかり良好で常態に復しているの、抜き書きを作ったり講義の準備をしたりした。…講義は火曜日に始まる。もちろんまた両方の講義には最大限の聴衆が集まるだろう。既に一昨日、社会主義についての講義にはほとんど六百名、国家論には四百名はが申し込んで来ていた。肉体的に消耗するようになるだろう。しかしおまえがこちらに来るまでには私も慣れているだろう。調子は実によい」（『伝記』：521頁）。

次の手紙は、いよいよ講義が始まった時の手紙である。「昨日の国家論の講義は超満員の最大限の聴衆だった（その三分の二は『臨時聴講生』だったが）。今日から『社会主義』が始まる。その他の点は万事上々だ——ただ、もう講義の準備にかからねばならない。おまえはハイデルベルクで十分休んでくれ！何もあわてることはないよ。ゆっくりとグルーレやヤスパースと話しておいで。…その頃には講義の準備も終わっているから、二人で一日『休息』し、お互いに『十分話し合う』ことが出来るだろう、ね、お母さん。——講義を考えてあがっていると言うのかい？私には講義は余り面白くなかったのだが、もし私が始められないとすれば数千マルクがふいになるところだったのだ。これはともかくちょっとしたことだよ…」（『伝記』：521-522頁）。

次の手紙では講義がうまくいっている、とヴェーバーは妻に書き送っている。

「今日は国家論、第二時間目だが、相変わらず聴講者は

多い——うまく『行った』。これで二日休息でき、それから講義六時間とゼミナール一時間の一週間だ。私は貪欲だ。だがとにかくうまく行っている——ただ私にはひどく食費がかかるのだ！哀れな子供達のためにはどれほど残るだろう？我々の収入は大体錠前職人のそれ『一時間六マルク！』に等しい…。ところで、お前はまだカールスルーエで講演しているのだね。しかしもうこれでおしまいにしよう！そして休息だ。親類や友人と一緒に聖霊降臨祭の休息を取るがいい。これまでのところ、私の調子は自分が敢えて期待した以上によい。エルゼのお陰で少々気散じが出来た…」（『伝記』：522頁）。

次の手紙ではヴェーバーは、講義を増やして収入を増やすことにまでも言及しているのである。

「…昨日は講義と非常に活発なゼミナール、だから三時間になる。おかげで手紙を書けなかった。今は休息、そして悪天候。もちろん膨大な校正を片付けなければならぬ。そうだ、われわれの収入は今後は決して再び今年ほどにはなるまい。こちらで三番目の正教授としての講義があれば、ひょっとすると…千マルクの講義料が期待出来る——ひょっとするとだ！そうでなければ金儲けのための講義をしなければなるまい——こいつは不愉快なことだ——こいつは私にはやはり出来ないだろう。…」(『伝記』：522頁)。

五月の最後の日、マリアンネはやっと帰ってきた。

「ヴェーバーは薔薇を手を持っていた。彼は具合が良さそうに見え、楽しげに打ち解けた様子だった。彼があればと恐れていた最初の講義ももうすんでいた」（『伝記』：522頁）。

この日の午後遅く、夫妻はイギリス公園を散策した。夜に入ると天候は激変し、翌日は寒く、雨が降っていた。午後、夫妻は近所にお茶に呼ばれて行った。翌朝、ヴェーバーの声はかすれていた。

「いつも心配性の妻は講義を休んでくれと哀願した——彼はそれを断固としてはねつけた。そして講義のあいだ彼は見事にその声のかすれを克服した——こうして三日が過ぎた。木曜日は聖体節だった——大学は休みだった。彼はそれを喜んだ。天気はまた温くなり、夕方夫妻は女友達と一緒に小庭に座って、熱心にしゃべりこんだ。」(『伝記』：523頁)。

翌日、ヴェーバーは自分が病気だと感じた。夜のうちから悪寒に襲われた。講義は取り消され、医者が呼ばれた。熱が高かったが、医者は気管支炎と診断し、致命的誤診を犯した。肺炎を見逃したのである。数日間、高熱と精神錯乱に苦しめられた末に、マックス・ヴェーバーはあっけなく亡くなってしまった。

したがって、この翌年、そして次の年、彼が講義を出来るようになり続けたのか否かを、われわれは知ること

が出来ない。但し、一つだけ言えることは、前年の母ヘレーネの死後、彼は講義をするということに関して、確実に回復しだしていた、ということである。ではなぜ母ヘレーネが死ぬと、その子供であるヴェーバーが講義が出来るようになるのか。講義ができないというこの男の精神症状はいったい何だったのか。ここでわれわれはとんでもない難問にぶつかることになる。答えは『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の“精神”』の中に隠されている。

注

(1)『倫理』論文は実は二種類ある。ひとつは精神疾患からの回復期の1904年から1905年にかけて「社会科学および社会政策学雑誌」(*Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd. 20, Heft 1, S. 1-54; Bd. 21 Heft 1, S. 1-110. 以下ではAfSSpと略す。)に掲載されたもので、題名は“Die protestantische Ethik und der ‘Geist’ des Kapitalismus”となっており、「精神」の部分に引用符が付いていた。いまひとつは『宗教社会学論集』におさめるために1919年から1920年にかけてヴェーバー自身による大幅な改訂が施されたもので、その題目には「精神」の部分の引用符は消えている。本稿では精神疾患からの回復直後のヴェーバーの実像を探究することを目的としているため、前者を用いる。但し、1919年から1920年にかけての改訂で意味があると思われるものがある場合には適時言及した。なお、〔 〕は引用者による補足を示す。

(2) 以下では妻マリアンネ・ヴェーバーによる夫の伝記を『伝記』と略す。本稿では、マリアンネ・ヴェーバー『マックス・ヴェーバー』(大久保和郎訳・1989年・新装第2刷・みすず書房)を用いた。但し、妻マリアンネによるこの『伝記』がどこまで信頼出来るものであるかに関しては議論がある。

例えば、安藤英治『回想のマックス・ウェーバー——同時代人の証言』(岩波書店・2005年)は、1969年から1970年にかけて、ドイツでヴェーバーを知っている人物を安藤が訪れ、インタビューを試みたものであるが、〔ドイツのヴェーバー研究は、肝心のヴェーバーの存命時代の生き残っていた人物達への聞き取り調査すら当時行っておらず、マックス・ヴェーバーの晩年の愛人であったエルゼ・ヤッフェに対する聞き取りすら行われていなかった〕、ドイツ語もそんなに流暢にしゃべれない日本人がわざわざ出かけて行って聞き取った、非常に貴重な資料である。安藤はそこで、最後のヴェーバーのゼミ参加者であったヴィルヘルム・シュティツヒヴェーから、マリア

ンネの『伝記』に関し、「私はあの本を読んで憤慨し、それから二度と読んでいません」（同書・61頁）

という重大な発言を引き出しているが、どの点が彼を憤慨させたのか、安藤自身も非常に興味を抱いていたこの点に関して、シュテイツヒヴェー自身が一度しか読んでおらず、それから三・四十年経ってしまっていることから、肝心の部分を聞き出すことに成功しなかった。

現在刊行中のヴェーバー全集は、書簡集を1906年からしか出しておらず、遅々として進んでいないのが現状である。また肝心のエデュアルト・バウムガルテンの下に保管されていた愛人エルゼ宛の手紙、及び、百通以上残されていると言われる1911年から1914年にかけてヴェーバーが結婚後の関係を結んだという若い女性宛のヴェーバーの手紙（これもバウムガルテンが保管していた）が果たして本当に公開されるのか否か、疑わしいと言わざるを得ない。最初に刊行された1906-1908年の書簡集の編者序文では、バウムガルテンの許にあった手紙も利用させてもらう、と書いてあったが、年々保守化してゆく全集編纂委員会の態度を見ると、危惧を感じざるを得ない。

また仮に書簡集が全て出されたとしても、そこにはヴェーバー側の手紙しか収録されぬため、『伝記』でマリアンネが用いたような、相手方の手紙も引用することでヴェーバーの手紙の内容を立体的に理解出来るようにするという手段を用いることも不可能である。本稿で必要なのは、実は母ヘレーネからの手紙なのである。

またさらに、精神疾患の真っ只中の期間のヴェーバーの様子を書簡集から知ることは、長椅子に一日中座って煙草をふかしていることしか出来なかった当時のヴェーバーに手紙など書ける筈もなく、はば不可能である。

本稿は以上の事情により、マリアンネによる『伝記』に大幅に頼らざる得なかった。本稿の最大の弱点がここにあることを、筆者は誰よりも承知している。

（3）エルゼと妹フリーダのリヒトホーフエン姉妹は、その恐るべき美貌から当時のサークルでは有名であった。妹フリーダは年上の男性と結婚したが、その後、D. H. ロレンスと駆け落ちをした。ロレンスの『チャタレイ夫人の恋人』のモデルになったのは、この妹フリーダである。

（4）カール・ヤスパースは、ヴェーバーを診察したことのある精神医学者。当時ヴェーバー・サークルに出入りし、ヴェーバーの影響で哲学者となった。尚、ヤスパースが持っていたヴェーバーの自己診断記録は、ナチスの台頭を懸念したヤスパースから1933年以後マリアンネに返され、1945年にマリアンネの手によって破棄された。したがって、ヴェーバーの正確な病状を記した記録は一

切残っていない。

（5）妹リリーの死は自殺であった。マリアンネは『伝記』での記述でそのことに触れていない（『伝記』:515頁参照）。長兄が精神疾患を患い、そしてその長兄が一番可愛がった末娘が、四人のまだ幼い子供達を残して四十歳にもならぬうちに自殺してしまう。この家庭はどこかおかしい。尚、筆者の情報源はマーティン・グリーン『リヒトホーフエン姉妹』（塚本明子訳・みすず書房・2003年・230頁）による。

—以上—

（受理日：平成17年10月1日）